

Dharmakīrti と Śubhagupta

—Śrutiparīkṣā 及び Sarvajñasiddhi に就て—

若 原 雄 昭

Dharmakīrti(Dh) に決定的な影響を受けた有部系の著者と考えられる Śubhagupta (Ś) (ca. 720-780) の著作は何れもチベット訳でのみ伝わるが、その中に Śrutiparīkṣā (ŚP) (東北 No. 4245 ; 大谷 No. 5743) 及び Sarvajñasiddhikārikā (SS) (東北 No. 4243 ; 大谷 No. 5741) なる韻文の二小品がある。筆者の見るところではこれらは共に Dh が Pramāṇavārttikasvavṛtti (PVSV) の後半部分で展開するミーマンサー学派批判 (及び Pramāṇaviniścaya (PVin) II の対応箇所) にその基本的構想を負う姉妹篇とも言うべき作品であるが、従来の研究では必ずしもこの点が明確にされていないように思われる¹⁾。周知の通り Ś 自身は別の著作 *Bahyarthasiddhikārikā* で唯識説を盛んに批判しているから Dh の正系では有り得ない²⁾が、ŚP 及び SS に関する限りは Dh の学説の祖述の域を出るものではない。この二作品はこの様に本来一括して論じられるべきものであるが、本稿では SS のみを取り上げて PVSV の記述との関連を中心に検討してみたい³⁾。

故に、もし〔超感覚的事象を含む〕全ての対象を知り〔貪欲等の〕欠陥を断じた何らかの〔卓越した〕人物が〔ヴェーダの作者或は注釈者として〕存在していれば、彼によってヴェーダの意味が確定される (don grub) こともあろうが、さもなければ〔恰も〕盲人の連続である。(v. 1)

下線部の盲人の比喩に注目すれば、前提となっているのは以下の PVSV の記述であろうし、pāda c : don grub は超感覚的事象に言及するヴェーダの語義を一義的に確定することを意味すると解すべきであろう。(PVSV ad v. 317 (Gnoli ed., p. 167, 11.2-5) : sarva eva hi puruṣo 'natikrāntadoṣavīplavas tam atīndriyam arthaviśeṣapratīniyamam vyākhyātā na svayam vetti / nāpy enam anyo vedayati/tasyāpi tulayaprasaṅgatvāt / na hy andhenākṛṣyamāno 'ndhah panthānam pratipadyate / [ヴェーダの] 注釈者である全ての人間は〔貪欲等の〕欠陥による迷妄を克服していない以上その超感覚的な〔ヴェーダの〕特殊な意味の限定を自分自身で知ることとは出来ない。また他の者が彼に教える訳にもいかない；その者も〔欠陥を持つ人間であるが故に無知であるという点では〕等しいからである。実際、盲人に手を引かれた盲人が道を知ることとは出来ないの

である)。

天啓聖典 (thos = śruti) にも、卓越した智慧を備えた人物が存在すると〔説かれて〕ある。だから〔その様な人物の存在を否定する〕全ての〔ミーマーンサー学派の〕学者は無知を伴っているのである⁴⁾。(v. 2)

ヴェーダにも全知者の存在が明言されているという主張は PVSV には見出せないが、以下に示す通り後代の全知者論証文献にはあり、或は SS がこの論法の locus classicus であるかもしれない。Cf. Ratnakīrti, *Sarvajñasiddhi*, p. 27, 11. 23-27: na ca vaidikaṃ kiñcid vacanaṃ sarvanarāsarvajñatvapratiṣṭhādam upalabhyate / pratyuta nimittanāmnī śākhāntare sphuṭataram eva sarvajñaḥ pratipāditāḥ/tathā hi “sa veti viśvaṃ na ca tasya vettā”(Śvet. Up. 3. 19c) ityādīnā ca sarvajño vede pratipāditāḥ⁵⁾ // (どんな人間も全知者たり得ないと説くヴェーダの言葉は全く見られず、寧ろ逆に nimitta と呼ばれる別のヴェーダ学派〔のテキスト〕には明瞭に全知者が説かれている：つまり「彼は一切を知るが、彼を知る者はいない」云々と、ヴェーダにも全知者が説かれているのだ。)

もしそれ〔全知者が存在するという上述の天啓聖典の記述〕は意図的なものであり、別の意図をもって説かれているのだというなら、そうだとした場合〔人間的〕意志の介入しない⁶⁾恒常なもの〔i. e. ヴェーダ〕にどうして意図が有り得ようか。(v. 3)

言葉の意味を決定するのは話者の意図であり、それは恒常な即ち非人為的なヴェーダの言葉には有り得ないと Dh はしばしば述べる。(e. g. PVSV ad v. 327 (p. 172, 11. 23-24): apauruṣeṣe tu na vivakṣā na saṃketaḥ kasyacid abhiprāyābhāvād iti na niyamo na tajjñānam/ ところが非人為的なもの〔であるヴェーダの言葉〕には〔意味の決定原因としての〕話者の意図も、〔それを明かす〕協約もない；〔作者である人間の存在を否定している以上〕いかなる者の意図も介入していないからである。こういう訳で〔ヴェーダの言葉には、特定の意味の〕決定はないし、〔仮にあったとしても〕それを知ることは出来ないのである)。

もし正理によって否定されるから〔上述の天啓聖典の一節は正しいとは認められない〕というなら、天啓聖典が正しい認識手段でないことになってしまう。故に、「供儀」等の〔正しいと認められているヴェーダの〕言葉に就てもどんな権威の伝承があらうか？(v. 4)

聖典の真偽が正理即ち他の認識手段によって検証されるとすれば、聖典独自の権威は失われると Dh は批判する (PVSV ad v. 314 (p. 165, 1. 27-p. 166, 1. 1): tataś ca kevalād (= pramāṇāntarāt) arthapratipatter asādhanaṃ evāgamaḥ syāt / おまけに、〔他

の認識手段] 単独で対象が知られることになるから聖典は能証でないことになってしま
う)。権威の伝承 (pāda d: tshad ma'i rgyun) は師資相承を意味する (Cf. *ibid* ad
v. 318 (p. 168, 11.3-4): *apauruṣeyānām śabdānām arthajñānaṃ na sampradāyaṃ na
yukter na lokād iti tatrāpratipattir nyāyā*/非人為的な「ヴェーダの」言葉の意味を知る
ことは、師資相承によっても、正理によっても、慣用によっても出来ない。だからそれを
確定出来ないのも当然なのだ)。

故に、天啓聖典が認識手段であるとすれば、[その作者たる] 一切の対象を知る人物
が立証されることになる。それを否定する愚者達 [i.e. ミーマンサー学派] にとって
は、「天界[を願う者は] 供養[を為せ]」等の「ヴェーダの」言葉は認識手段「真」で
はないということになる；ヴェーダの一部分であるから；「全知者が存在する」という
[ミーマンサー学派が承認しない上述の天啓聖典の] 言葉のように?(vv. 7-8)。

もし、「[天界を願う者は] アグニ[ホートラの供養を為すべし]」云々のヴェーダの
言葉は認識手段「真」である；ヴェーダの一部分であるから；「火は薪を⁸⁾焼く」云々
の言葉のように、というなら。(v. 9)

下線部の論証因「ヴェーダの一部だから(*vedaikadeśatvāt)」に注目するとき直ち
に以下のPVSVの記述が想起される：PVSV ad v. 330 (p. 173, 11.14-19): *anyas tv
apauruṣeyam āgamalakṣaṇaṃ parityajyānyathā prāmāṇyaṃ vedasya sādhayitukāmaḥ
prāha—avitathāni vedavākyaṇi yatrāpratipattir; vedaikadeśatvāt; yathā “agnir himasya
bheṣajam”* (Taṭṭi, *Sam.* 7.4.18.2) *ityādivākyaṃ iti/* (他派[ミーマンサー学派]は、
「非人為的なものであること」という聖典の定義を放棄して、別の方法でヴェーダの真を
証明しようと考えてこう言った——〈主張命題〉[仏教徒により真実であると] 承認されな
いヴェーダの文章は虚偽ではない；〈論証因〉ヴェーダの一部分であるから；〈実例〉「火
は寒さの対立物なり」[・「十二ヶ月が一年なり」]等の文章のように；と)⁹⁾。v. 9 前半が
筆者には上手く読めず(拙訳が原チベット文に対して無理であるのは承知している)、
実例も筆者のように解したとしても PVSV に挙げられるものとは一致しないが、
ともかくここで Ś が Dh の批判的言及によって知ったこのミーマンサー学派の
提出する論証因を逆手にとって相手を論破していることは確かである。

v. 10 以下に就ても論じるべきことは多いが¹⁰⁾、既に紙数が尽きたので各々の
PVSVの対応箇所を次に略記するとどめる：v. 10ab ← PVSV ad v. 326ab, p.
172, 11.4-6 (Cf. ŚP vv. 11-12)；vv. 10cd-12a ← *ibid.* ad v. 327, p. 172, 11.16-23；
v. 12bcd ← *ibid.* ad v. 308, p. 162, 11.11-13；vv. 17, 18, 20 ← *ibid.* ad v. 308, p.
163, 11.9-18；vv. 21-23 ← *ibid.* ad v. 308, p. 162, 11.14-21¹¹⁾。

1) ŚP に就ては夙く宮坂有勝氏の研究(シュバグプタの言語論, 智山学報第7輯, 1959)があり, Bhartṛhari に多く言及される。SS に就ては渡辺重朗氏が最近校訂テキストと和訳研究を公にされ(Śubhagupta's Sarvajñasiddhikārikā, 成田山仏教研究所紀要第十号, 1986), *Tattvasaṅgraha* (-*pañjika*) (TS(P)) 第26章及び *Bodhisattva-bhāmī* (BB) との関連に専ら注目される。以下 SS テキストはこれによるが, 筆者には同氏の読みやテキスト訂正, 訳文に従えない場合が多々あり, その一部は本稿に示す。2) このせいで後には急速に関心が薄れて改訳されることもなく放置されたとおぼしい Ś の著作が, 前伝期には珍重されて集中的に訳出された理由を, Frauwallner は当時既にチベットと密接な関係にあったカシュミールの学者達がやはりカシュミールを活動の場としていた Arcaṭa 及び Dharmottara の著作と共に後者の師であった Ś の著作をも齎したためであると推測する(Zu den buddhistischen Texten in der Zeit Khri-Sroñ-Lde-Btsan's, SS.101-2)。3) この SS は, PVSV 後半部の記述にもとづいて全知者論証を構成しようとする最も早い試みであり, TS(P) を含めた後代のいわゆる仏教論理学派の作品の一つの先例を提供したと言えるかもしれない。後代の全知者論証著作の多くは専らヨーガ行者の四諦の直観を主題としており, この点では SS は確かにやや異質であるが(Cf. G. Bühnemann, *Der Allwissende Buddha*, Einleitung VII), 筆者にはこの差異は重大なものとは思われない。4) pāda a, thos を渡辺氏が「聴聞」と訳される(以下の v.4, v.7 でも同様)のは筆者には不可解であり, 従ってこれにもとづいて同氏が BB にトレースされるのも妥当とは思われない。また pāda d に就いての同氏のテキスト訂正の必要を認めない。5) これとパラレルなしかもより詳細な記述は既に TS(P) vv.3511-13 に見られること, 又この Śve. Up. がジャイナ全知者論証にも引用されることは, Bühnemann, op. cit. Anm. 581-584 に詳しい。6) pāda c に対する渡辺氏の訂正は採用出来ない。7) vv.7-8にかけて Sde dge, Pekin 両版共に何らかの理由で 1 pāda 分不足しており或はテキストに混乱があるかも知れないが, 今は一括して訳出する。8) pāda d, bzin を śin と訂正して読む。9) Dh はこの直後でこの論証は śeṣavadanumāna であると一蹴している(Cf. 秋本勝, Āgama論一考, 印仏研35-2)。尚, 彼は前にもこの論証に一度言及しており(PVSV p.152, 11.2-11), 後の PVin でも簡潔に論じている(E. Steinkellner, *Dharmakīrti's Pramāṇavinīścayaḥ*, Teil I, S.66, 11.6-8: phyogs gcig la mi slu bas (*ekadeśāvisamvādana) kyañ luñ gi mtshan nid du smra'o // mi mthun pa'i phyogs la ma thoñ ba tsaṃ gyis mi 'grub pa'i phyir de'i don ni ma ñes pa ñid do // Cf. ibid. Teil II, Anm.252) 10) とりあえず SS テキストに就て以下の訂正を提案しておきたい: v.23 pāda c, miñ→mi; v.24 pāda c, yis→yi。11) Cf. 拙稿, マントラの効果と全知者, 仏教史学研究 31-1, 1988。

<キーワード> Dharmakīrti, Śubhagupta, Sarvajñasiddhi.

(龍谷大学短期大学部非常勤講師)